金沢美術工芸大学の一九五〇年代

森　仁史

昭和二十一年（一九四六）七月、敗戦からわずか一年後に金沢に新しい美術専門学校が生まれた。これを推進したのは金沢在住だった美術関係者（浅田二郎、長谷川八十、蒲生欣一ら）が結成した石川県美術文化協会メンバーであった。彼らの案にのった金沢市は美術館と同様に、空き家となっていた陸軍兵器庫三棟を石川県から譲り受けた。同校はその後二十五年（一九五〇）に短期大学（三年制）となり、一九五五年に四年制の金沢美術工芸大学となった。学校制度も他の分野同様、GHQの指揮のもとで戦前のシステムの解体、再編が進められ、まず昭和二十三年（一九四八）に義務教育の初等教育は六・三制に再編され、中等教育は単線化された。高等教育の制度改革が確定するのはこの後で、二十四年になる。金沢の事例はその間隙を縫っていたことになる。

金沢美術工芸専門学校は美術文化協会の熱意とは裏腹にその運営は決して順調ではなかった。設立当初こそ文化創造に熱意を燃やす学生が集まり、そのなかには復員直後の軍服姿で登校した北出不二雄や北国新聞の名物記者鴨居悠の長男玲の姿も見える。しかし、やがて志望者が減り、一九五〇年度は志願者全入となった。とくに入学生に市内出身者が少ないことが問題視されるようになった。新制大学設置の基準が明確になっていなかった昭和二十三年一月には、地元では北陸地域に一つの総合大学、すなわち八学部から成る北陸総合大学を誘致する運動が組織され、このなかに美術学部として金沢美術専門学校を統合する案が想定された。また別に地元からは、地域産業への貢献を求めて、同校が純粋美術や美術工芸だけに教育分野を限定せず産業に貢献する路線への変更を求める声も強く、市当局もこれを無視できなかった。これらの要望や市としての改善策を検討するため、昭和二十八年（一九五三）三月十八名からなる学制改革審議会が設置され、次の委員が作成された。大学からが三名なのに対し、実業界からは五名が選ばれていることが目につく。

徳田與吉郎（市議会議長）、石見谷弘三、喜多美由喜、高倉政雄、北元喜雄（以上市議）、吉田圭蔵（市助役）、三村武男（市総務部長）、織田信治（市教育長）、森田亀之助（美大学長）、高村豊周（同教授）、大島重義（同講師）、戸田正三（金沢大学学長）、嵯峨保二（県美術文化協会長）、越馬徳治（津田駒工業社長）、麻生徳治（北陸機械社長）、真柄要助（真柄組社長）、砂長谷哲夫（品川精機社長）、森田伊平（倉庫精練金沢工場長）

残念ながらこの審議会の議事録や審議報告を見出すことができていないため、地元新聞報道に依って概略を記すと、六月には板垣鷹穂教授の意見の付された改革案が審議会に提案され、九月二十四日の審議会で産業美術学科（六十名）と美術学科（四十名）からなる設立案が策定された。しかし、翌年一月には改革案がまとまらないという理由で、この年度の募集は従来通りと決定された。ただ、昭和二十九年（一九五四）三月には学内に産業美術相談所が設けられた。五月十日金沢市は再び美術科と産業美術科への改組とそのための予算案を確認したが、これは市議会への提案のためだったと思われる。このとき、将来金沢

大学へ美術学部として統合かという観測報道もなされている。六月十二日市議会全員協議会が開催され、大学改組案が審議された。しかし、賛否両論に分かれて結論が出ず、「更に各党で検討」と決した。その後、八月には市議会は市当局の学制改革案に原則的に賛成し、商業美術専攻を産業美術学科とすることが改革案に記載されたと報じられた。九月二十七日に井村重雄金沢市長から文部大臣に宛て、金沢美術工芸大学設置が申請された。

審議会論議の経緯はごく概略のみで結論しか明らかにできないのだが、短大は早くから産業美術教育の強化を改組の主眼としようとしていた。だが、市議会の同意をすんなりとは得られなかったため、予定より遅れて大学設置申請したということであろうか。恐らく改組案は当初案とあまり違いはなかったと考えられる。創設から短大まで、美術科（日本画、洋画、彫刻）と工芸科（陶磁、漆工、金工）であった学科が当初案通り美術学科（定員四十名）と産業美術学科（六十名）とに編成替えする申請案がまとめられ、承認されたのだからだ。

美術専門学校の準備に当たって、最初に着手されたのが中心となる校長の人選であった。金沢市は当初から高村豊周を候補としていた。石川県美術文化協会メンバーからの推薦かと思われるが、結論から言えば、これは実現しなかった。先ごろ、金沢美術工芸大学に保管されていたこの人選の経緯を物語る、高村、森田らから津沢佐昌正事務局長あての書簡綴りを一読することができたので、従来の記述を補充しておきたい。推薦を受けた高村は早くから森田の名を挙げていた。ただ、同じ頃多摩帝国美術学校も専門学校化を目指し、森田を推す動きもあったが、井上哲治が多摩造形芸術専門学校（一九四七）校長となった。金沢市の準備を聞いて、森田が最初に声をかけたのが板垣鷹穂であり、すぐに了解の返事を得ている。この二人の間柄からすると、前述の学制改革審議会への最初の提案は森田から板垣が依頼されて作成したと推察してもいいのかもしれない。

また、高村が最終的に金沢市に校長就任を断った理由として、彼が挙げたのは子息の教育問題だと記されている。健康状態に問題があり、進学を控えている年齢だったため、どうしても東京を離れることができないと高村は津沢に説明している。

金沢美術工芸大学の新機軸は学校の世評を押し上げることができた。昭和三十一年（一九五六）には志願者は定員の二・六倍、三十五年には産業美術学科七・四倍、美術学科三・五倍となったのである。

＊　＊

一九五〇年代は美術が戦時とは全く異なる新たな社会が成り立ってくるなかで、自らもあるべき姿を模索し、実践する時代を迎えていた。金沢美大に集った作家たちもこの時期に顕著な足跡を残している。

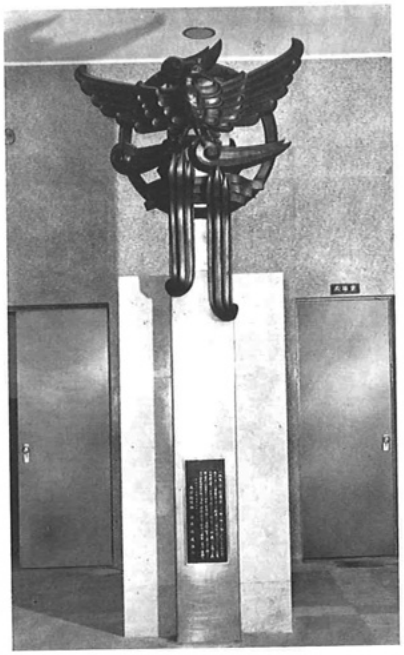
1　金沢市西町教育会館

2　1階ロビー

宮本三郎は昭和二十七年（一九五二）十月に竣工した繊維会館（現存、金沢市西町教育会館）〔図1〕の一階ロビーに壁画制作を依頼され、二十九年（一九五四）六月二十三日に来沢し、繊維会館を訪れ構想を練り、翌日から現場である一階ロビー〔図2〕で制作を開始し、二十九日に完成させた。宮本は小松近傍の農村の出身だったが、昭和二十年（一九四五）春石川県内の美川町小舞子に移住し、五月には母校の小松中学校に同校出身の特攻兵像を寄贈し、次いで《大東亜会議図》を制作中に敗戦を迎えたのだった。十一月には金沢市彦三に転居し、金沢美術工芸専門学校創立時に教授に招かれ、二十五年（一九五〇）まで在籍した。この間、二十二年春、宮本宅を満洲から帰った栗原真と神戸から田村孝之介が訪れ、二紀会結成を準備した。

繊維会館は谷口吉郎設計になるもので、五井孝夫が監理した。金沢生まれの谷口は北陸の雨の多い気候を熟知しており、このためコンクリートの軀体に切妻屋根をのせた。五井は昭和三年（一九二八）東京帝大工学部建築学科を卒業し、谷口の妹正子と結婚しており、谷口の義弟にあたる。戦後は真柄組（一九四六年―）、石川県建築課（一九五一年―）に勤務し、北陸の鉄筋コンクリート施工に体験を積んでいたので、石川県議会議事堂（一九五一―五八）など谷口の北陸での協労者として活動した。昭和二十九年（一九五四）に独立して五井建築構造設計研究所を運営していたが、翌年から金沢美術工芸大学産業美術学科に教授として着任した。

宮本が制作した作品は《産業と文化》（現存、二七〇×五〇〇センチ）と題され、繊維、農漁業、商業など働く人々を中心にして音楽演奏者と画家（なぜか半裸の女性）に建築家を周辺に配し、総てで十三名を合板に油彩で描いた群像画である。竣工当初は壁画制作の予定は語られていないが、繊維王国石川は華やかに空間を演出する必要を感じたのだろうか。宮本は「この会館はさすがに谷口氏が設計したものだけに落ちついた明るい建物なので、これにマッチし、しかも装飾性をもつたものという構想の下に静かな落ちついたものをかいたつもりである」（『商工石川』第50号）と取材に答えている。数年前に自らが体験した戦争の昂揚とその後の戦禍の濃い社会を忘れて、静かに落ち着ける



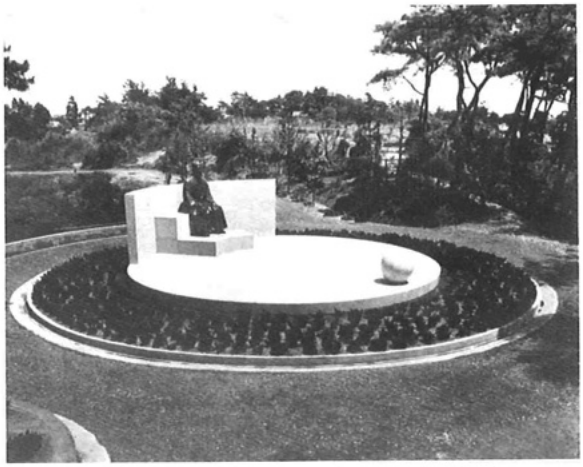
3　高村豊周・板坂辰治《八咫烏》1954年

ものなのだろうか。前年の金沢の参議院選挙では、アメリカ軍による内灘射爆場接収が争点となり、反対派が勝利していたのだ。

嵯峨保二が社長を務めた北國新聞社は昭和二十八年（一九五三）年末本社社屋を焼失したが、翌年九月には早くも新社屋（清水建設〈山田鉞也〉設計）を完成させた。この正面玄関に《八咫烏》像が据えられた。〔図3〕台座に記された嵯峨による銘文は次の通りである。

八咫烏ハ世ノ嚮導者トシテ神ガ地上ニ降シタモノト日本古典ニ示サレテイル、言霊学上コレヲ解明スルト、八咫烏ハ「ヤアタガラス」デソノ真義ハ八咫鏡ニ等シク、四方八方ヲ明ラカニスル鏡トナリ、マタ神ノ教トモナル。按ズルニ新聞ハ現代ノ八咫烏デアリ、社会ノ実相ヲ写シソノ進路ヲ明ラカニ示スモノト信ズル。ヨツテ社屋正面ニ八咫烏ノ雄姿ヲ顕現シ、新聞人ノ使命ト責任ヲ表徴スル。

竣工に合わせて刊行された『北國新聞六〇年史』によれば、本作は原型を高村豊周が制作し、その美校での教え子の一人板坂辰治（一九三八年彫金部卒）が鋳造したとのことである。嵯峨は石川県美術文化協会会長だったので、メンバーたちから高村を紹介されたのかもしれない。いずれにせよ一九五〇年代の金沢と高村の所縁を現す好古の存在に違いない。高村には、こうしたモニュメント像は類例がなく、貴重な作品なのだが、残念なことに、平成三年（一九九一）この社屋を取り壊して、現社屋が新築された際以降は所在が確かめられない。嵯峨はまた同書で大本教信者として、出口王仁三郎の指導を受け、自らの使命を「平和で豊かな世界が一日も早くこの地上に実現することであり、これがためにはまずわれわれの住む強度を基点として、日本へ世界へと努力を積み重ねていく」ことだと主張している。であるならば、八咫烏像は新聞社のみならず、嵯峨自身の信念でもあるかのようである。であるにもかかわらず、照らされるべき社会はその後八咫烏を隠す性をも身に着けたのであろうか。なお、板坂は昭和二十二年（一九四七）から金沢美術専門学校講師を務め、二十五年同短大教授、三十年同大教授として教鞭をとった。

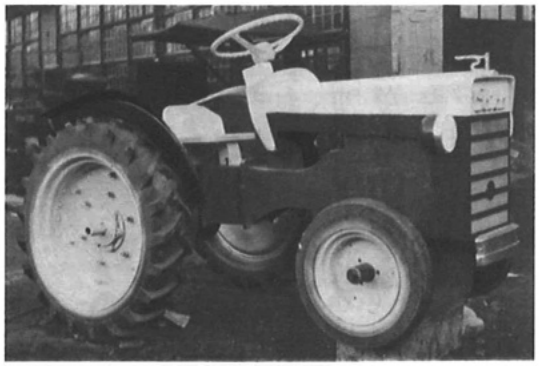


4　板垣鷹穂デザイン・中川為延彫像《笠井順八モニュメント》1955年

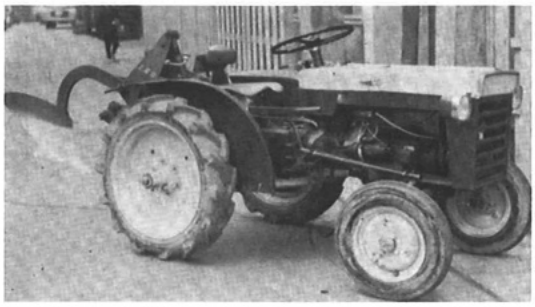
昭和二十九年（一九五四）、板垣鷹穂は笠井順八頌徳会と小野田市からモニュメント（現存）〔図4〕の設計を依頼された。笠井は天保八年（一八三七）荻藩士として生まれ、幕末には江戸湾警護に当たったが、維新後藩庁で財政改革に従事し、明治七年（一八七四）から士族授産事業としてセメント製造に着目し、十四年政府の援助を得て、民間企業として初の小野田セメント創業し、成功に導いた。板垣はこの設計経緯を金沢美術工芸大学紀要である『学報』第三号（一九五九年）に詳細に報告している。ちなみに、板垣はこの『学報』第四号（一九六〇年）全七十一頁を費やして、「ミケランジェロの研究」を発表している。

依頼者から彫像の高さを八尺以上とすることと、大理石事業も行っていたので、セメント以外に大理石材も使用したいという要望をうけた。板垣は最初に提案された設置場所が像主ゆかりの住吉神社に対面し、高台であるため小野田市全体が展望され、海辺の港湾、小野田セメント本社、工場、中央研究所が眺望できるため、「創立者の記念施設を立案する充分な必然性ももつ」と判断した。次いで具体的に、「記念施設が緑地計画と一体となり、市民公共の用途に適して而かも頌徳事業の精神に合うために、予定された丘陵を円形に整備して展望台に兼用し、併せて式典行事の場に設計することが至当」だと結論付けた。平面プランを円形とした理由として、調和的で使いやすいこと、古典、ルネッサンス時代の劇的空間は円形で記念性の形式だったことを挙げている。これに基づき三重の同心円を平面設計の基本とし、中央の円に壁を立て、その中央に坐像を置く。その反対側縁に球体を置き、坐像に対応して造形性を整える。「ここに何等かの「象徴」を見出してもさしつかえない」と考えた。要望の二メートルを超える像はあまりに大きく、笠井翁の簡素にして奥ゆかしい人間性や次代への親しみにそぐわなくなることを避けるため、中心円を一〇メートル五〇センチとし、像の大きさを強調しないようにし、周囲に三メートル、次いで三メートル七五センチの円を配置した。

各部分は「彫像を核心として清楚な均整をもち、樹木の緑色と調和して、記念地域を統一する」ことを目指し、彫像は黒色の骨材に色素を加えたテラゾー、球は淡灰色をまじえた白色大理石、床面その他は白サンゴのテラゾーとした。昭和二十九年（一九五四）の夏と冬に現地を訪れ、頌徳会の希望を聞き、現地を確認して設計図をまとめた。彫刻原型は中川為延（一九〇四―六七）に依頼した。中川は戦前から帝展に社会性を帯びた人体彫刻を出品していたが、昭和三十年（一九五〇）から小野田セメントが支援していた白色セメント造形美術会委員としても活動していた。モニュメント除幕式は予定通り昭和三十年（一九五五）五月三日に行われた。板垣は設計の昭和二十九年から三十年にかけて東京大学で建築美学を講じていたと述べていて、自身としてはその実践なのだと意識していた。この意識がモニュメントの造形というよりは継承される地域の記念性を第一に置く設計方針をもたらしたのだろう。いずれにしてもこの年五十四歳であった板垣からすれば、まさに脂ののった時期の貴重な実践だったと言えよう。また、金沢の学生にも彼の授業が東大と同じ内容であることに注意を喚起していたと伝えられるので、板垣にとって自らの知的営為と実践とが嚙み合った



5　森喜紀、杉浦鋭夫、無量井三郎《4輪トラクター原寸木型模型》1960年



6　《4輪トラクター試作4号車》

誇らしい作品だったのではないだろうか。

昭和三十五年（一九六〇）、産業美術学科教員であった森嘉紀、藤浦鋭夫、無量井三郎は佐藤造機（松江市、一九一七年創業）の依嘱を受けて、四輪トラクターの試作開発を行なった。これも『学報』第五号（一九六一）に詳細な報告が発表されている。彼らはまず一旦社内の技術者が完成させた試作車をもとに、飽きのこないデザインを求められてエンジンカバーの成形、配色から始め、ドライバーの視野の確認、検討を経て、原寸で木型模型〔図5〕を作成した。これをもとに佐藤造機技術スタッフと検討を重ね、並行して開発が進んでいた搭載エンジンとの調整、製造工程の板金加工などのすり合わせを経て、ほぼ生産車に近い試作四号車〔図6〕を完成させた。日本における四輪トラクター開発の草創期にあって、乏しい文献情報から先行事例を集め、志向を繰り返す現場エンジニアとの協議を行なって、よく完成に漕ぎつけることができたものである。

いずれの事例も創作者は戦後文化の在り方を模索するなかで、自らの制作根拠から率直に行動しようとしており、社会もそうした創造を求めようとする熱意に溢れていたがために、その接点には未曾有の炎が燃え盛ったのであろう。戦後日本文化の輝かしい一頁を見る思いがする。

詩（うた）の国探訪——登山の詩学・水辺の詩学

山田　俊幸

「99・5～6」の記載があるから一九九九の五月、六月なのだろう、富田林市金剛公民館の依頼で《詩（うた）の国探訪》というテーマで、話をしたことがある。そこで思いついたのが、「登山」と「水辺」という詩人たちのモチーフだった。それについて、二カ月、六、七回の話をした。そんな折にメモ書きしただろうファイルが、古いフロッピーから出てきた。ちょっと気になるところもあるので、今回はそのフロッピーに保存されていたデータを引っ張り出しておく。

明治末から、登山はにわかに詩人たちを魅了した。小島烏水の一連の山岳書は言うに及ばず、じっさいに集団で山に入った。こんなことは、最近ではよく書かれているのだが、二〇〇〇年以前にはあまり語られなかった。高村光太郎の登山もそうで、それらを念頭においての話のメモだったろう。

以下はそのメモ。

※　　※

○高村光太郎と登山

風間光作『山峡詩篇』（青磁社、昭和十八年十月二十日）

尾崎喜八「序」

「風間君は自然が好きで、早くから山登り、峠歩きをやつてゐる。そ

一寸

第六十九号　二〇一七年二月

第六十九号目次

新・旧刊案内69　青木　茂　1
子規横顔の肖像について・
『浅井忠全作品集』について　そのⅡ
戦後の生活版画―児童の「版画」をめぐって―　岩切信一郎　7
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（24）　大谷　芳久　17
旧植民地の図画教員　金子　一夫　45
―附論・植民地外の旧在外学校
ヒロイチ追善記（1）　丹尾　安典　53
活版落穂ひろい（三）　銅・石版画遺聞65　森　登　61
『独和会話篇』と川上正光
金沢美術工芸大学の一九五〇年代　森　仁史　71
詩（うた）の国探訪――登山の詩学・水辺の詩学　山田　俊幸　76

新・旧刊案内69

子規横顔の肖像について・『浅井忠全作品集』について　そのⅡ

青木　茂

去年の暮に本誌『一寸』を時節の挨拶のつもりで送ると、時には北川太一さんのように「九十才を過ぎて、毎日生れて初めてのような出来事が続くようなおかしな一年でした」とあったり、鍵岡正謹さんは「子規の松山で買うたハガキ」（図1）に面白いことを書いてきたりする。この端書は千金に価する。僕は本誌33号、68号に雑誌『日本及日本人』の写真版「子規居士像　浅井忠氏筆（古島一雄氏蔵）」をのせた。最近出版されたカタログレゾネという『浅井忠全作品集』の「図版Ⅰ　C一一三　子規像」は、この浅井の「原画（鉛筆）に加筆のあるものではないか」と本誌前号には書いた、この疑問文はもちろん後人の加筆という断定文である。ところで鍵岡さんがくれた松山市立子規記念博物館の絵はがきは便利堂製である。製作者・社は『日本及日本人』の写真版印刷では浅井忠にしては鉛筆の線が弱く細いので、製版中に原版を修正して明暗を強くし喉仏は注意しないで、それでも耳の後ろの不必要な・または誤って入った疵かゴミは入れ、胸元は黒くなり過ぎたが、精一杯の修正をし、画像の地色は雑誌の紙の色として画像を切り抜いて貼りバックを白くして印刷し納品したものと見える（どんな田舎の写真屋さんでもお見合い写真は美人にしてくれる。僕が考えるにひょっとし